

雪印のミニ野菜シリーズ

ミニレタス「仮称ミニコ (SB-8)」、 ミニニンジン「フレッシュ」のご紹介

雪印種苗 (株)
畑作園芸本部 営業課

1. はじめに

野菜のミニ化は核家族化に伴ってますます進んでいます。しかし、単にサイズが小さい野菜が求められているわけではなく、個性的な野菜や特徴的な野菜が注目され、品質および食味のすぐれた食べておいしい、栄養価に富んだ健康によい野菜が消費者から強く要望されています。

今回、弊社取り扱い品種の中で、来春より本格発売を予定しているミニレタス「仮称ミニコ (SB-8)」および各地でご好評いただいているミニニンジン「フレッシュ」についてご紹介いたします。

中旬からトンネル被覆を開始し、前述の厳寒期を除いた早春どりまで被覆します。

外葉もコンパクトであることから密植栽培が可能です。畝幅170cmで5条マルチ (条間20cm、株間20cm、ちどり) が主流です (約15,000株/10a)。レタスの一般的な栽植密度からすると概ね倍近い株を入れることができます。

出荷にあたっては外葉をはずし、

1玉ごと袋詰をして、1箱12玉で主に地元市場や関東のスーパーマーケットへ出荷しています。レタスは単価の変動が大きく、相場が崩れると大変厳しい販売となることがあり、数量的にはそれほど大量に出荷できないものの「仮称ミニコ」は比較的単価が安定しているため、ある程度計画的な作付のもと、取り組んでいるとのことでした。

2. 福岡県でのミニレタス「仮称ミニコ (SB-8)」の栽培事例

福岡県JAみいでは10年近く前から差別化を図る目的で特徴のある野菜に取り組んでおり、レタスを主要産品としていることから、非結球レタスの弊社品種「フリルアイス」やコスレタス等の栽培をおこなっています。

本品種は、使い切りサイズのミニレタスが欲しいとの市場からの要望に応え取り組み始めました。長期出荷を前提として、播種期は8月上旬から翌春3月上旬までの長期間で、9月下旬から6月中旬まで出荷されています (ただし厳寒期の1月下旬から2月下旬までは収穫なし)。元来暑さに弱いレタスなので、8~9月定植は白マルチを使用し、9月下旬以降から黒マルチを使っています。一方冬期間の栽培については11月



写真① 収穫適期を迎えた「仮称ミニコ (SB-8)」



写真② 出荷ダンボール



写真③ 出荷される箱詰荷姿 (左:ソレイコ、中央:フリルアイス、右:仮称ミニコ)

3.千葉県でのミニニンジン 「フレッシュ」の栽培事例

千葉県野田市の深津さんは、18年ほど前からミニニンジン『フレッシュ』の栽培に取り組んでいます。甘味が強く、ニンジン特有の臭みが少ないおいしいニンジンとして市場での評価が高く、現在約80aの畑を使って周年栽培をおこなっています。近所の方々も「スーパーのニンジンは食べないのに、ここのニンジンだけは子供もみんな大好きで、製品にならない曲がりや規格外を目当てにいつも買いに来ている」ほどです。

フレッシュを導入した当初は連作障害が出て大変苦勞されたそうですが、畑をしっかり休ませることでほとんど障害の心配はなくなりました。しかし生育適温が20℃前後のニンジンでは夏場の栽培が最も難しく、発芽までは遮光して高温、乾燥から守り、その後遮光ネットを除去して播種後60日程度で収穫をおこないます（秋冬は90日、春どりは120日）。特に収穫後は乾燥しないよう予冷（12～13℃）をして出荷調整をおこないます。夏場は日持ちしにくいので毎日必要量を収穫しなければならず作業も大変です。しかし周年で品質の良いものを出荷することで、

市場から厚い信頼を獲得しています。

出荷にあたっては、規格が根長によって細かく分けられ（標準的なM規格が根長10cm以上で9～10本/パック約150g）、さらに時期によっては葉付き出荷の要望が市場からあがってきます。出荷調整作業が細かいため、今以上の生産拡大が図りにくい状況にあります。少しでも作業性を向上させ、品質面ですぐれるおいしいニンジンをPRして消費拡大につながるよう取り組んでいるとのことでした。



写真④ フレッシュ栽培圃場



写真⑤ 出荷ダンボールと荷姿